

## 学問を探究する三冊

◀学生時代に触れた本の中で印象深い本は何ですか？

M・ウェーバーとの出会いが大きかったです。彼の著作に『職業としての学問』（岩波文庫）という本があります。

これは一九二〇年ドイツ革命時、非常に政治的に緊張した状況の中で学問と政治の問題が問われた時に、学生の求めに応じてウェーバーが行った講演です。その中でウェーバーは、ソクラテスの時代、哲学の中で探究されるものが生きる意味をもたらす、と語っています。中世ヨーロッパの時代になると、自然やこの地上はサタンが支配する世界で、教会が神の世界であると。キリスト教世界ですから神が真理、生きる意味ですよ。そこでは自然も悪しきものとして表象されます。だから哲学が神学に変わり、教会だけが人々に光をもたらすことができる。

ところがルネッサンス——これは教会側にあった神を人間側に引き寄せる運動と見られるのですが——になって自然への語られ方が変わる。自然の中に神が宿っているとい

う話になってくる。自然は悪魔のものではなく、そこには神の秩序がある。そうして自然科学は始まったという話をウェーバーはする。科学の中に生きる意味に結びつくような神の秩序を発見できるのだと。

でも我々が生きてきた二〇世紀という時代には、誰も科学という営みの中にそんなことを信じている者はいませんね。そこで学問とは何かという話を展開するのがこの本なのです。そこで用いられるキータームが「価値自由」です。これは価値に対して「中立」ではなく、様々な価値観点に徹底的にコミットしながら、どの価値観点にも拘束されない自由、ということ。響きはいいのだけれど、ここには、自ら拠って立つ究極の価値そのものを常に括弧にいれる態度が要請される。このことは同時に、もはや学的営み自体から意味を引き出すことができない、ということも含意されているんですね。

◀大学時代のゼミで人類学も学ばれていたとか？

その時に読んだのが、フィリップ・K・ボックの『現代文化人類学入門』（講談社学術文庫）でした。この本が私にとっての人類学との出会いです。文化人類学は文化を通じて人間とは何かを説明していく学問です。問題の関心は常に人間にある。人間は実に様々な社会や文化を創り出します。世界は多様です。人類学は極めて個性的な姿をとって表現される文化・社会を、地球上の隅々に求め、調査・研究を行います。人類学者が措定する社会とは、その中である種完結する統合的、有機的全体を成しているもの、つまり機能に閉じた連関として考えるんです。このような枠組みで、人類学者は、いわば手分けをして、様々な社会を記述していく。一つ一つの社会の記述は、個性的な対象として立ち現われて来るのですが、一方でそういう記述を蓄積していきながら、それらを通して普遍的なレベルでの「人間」とは何かを常に問うている。個性を記述しながら、同時に比較可能性に開かれた視点を常に保持しているんですね。

私も韓国を扱う場合、人類学的な関心から韓国に入っていくわけです。韓国を見ることは、個性として捉えられる韓国そのものももちろん見ているけれど、同時に常にそれを通して人間とは何かを考えることなんです。

◀人類学への関心はどこが出発点なのですか？

高校時代に印象に残っているのは大塚久雄の『社会科学における人間』（岩波新書）です。高校生の時だから必ずしも十分に理解できていたわけではないけれど、この本を通じて、学問というものへの魅力をすごく感じました。この本の中にロビンソン・クルーソーの話が出てくるんです。この物語の主人公の振る舞い方に、自らの生活を合理的に秩序付けていく、ピューリタンの人間類型が描かれているのですが、この人間類型論の話が、大学に入ってからの人類学への関心へと結びついた面があります。社会秩序の形成力、そのプロトタイプとしての人間類型論は、冒頭に挙げたM・ウェーバーの話と接続します。この本は、学部的一年生でも読みやすく、いまでは古典的な部類の本になるかもしれませんが、おすすめです。

にわ・いずみ 一九五六年生まれ。東京外国語大学大学院  
総合国際学研究院教授。宗教社会学・朝鮮宗教論。編著に  
『韓国百科第二版』（大修館書店）。